

在学生 Web 調査の方法論について

武藤 玲路・武藤 郁和

Survey Methodology on College Life of Students through Websites

Ryoji MUTO・Fumikazu MUTO

キーワード：在学生調査、Web 調査、短大評価、到達度、満足度

1 背景と目的

これまで、短期大学コンソーシアム九州では、短大生を対象に「短大生の学びと生活」に関する3年間の追跡調査（パネル調査）を実施してきた。武藤等（2012）では短大在学1年次と2年次の調査について、武藤等（2013）では短大卒後1年半の調査について、武藤等（2014）ではこれら3年間の追跡調査について報告した。その結果、短大評価の規定要因には、学習成果の到達度と学生支援の満足度が関連していること、特に、学習支援、進路支援、人間関係の要因が影響していることが示唆された。

これからの中大教育の質を保証するためには、学習成果の到達度の向上を図るとともに、学習成果に関する適切な査定が必要になる。このため短期大学コンソーシアム九州では、平成24年度から5年間にわたる大学間連携共同教育推進事業（連携GP）において、「短期大学士課程の職業・キャリア教育と共同教學 IR ネットワーク」に取り組んでいる。すなわち、短大教育における学習成果の到達度の向上を促進する職業を通した学びとしての「短期大学の特色ある職業・キャリア教育の充実」と、学習成果の確実な査定を行うための「共同教學 IR ネットワークシステムの構築」を目指している。

本研究は、後者の「共同教學 IR ネットワークシステムの構築」の一環として、従来質問紙で実施していた在学生調査を Web 上で実施すること

で、効率的で多角的な調査の実施・集計を可能にする方法論について検討することを目的とした。なお、今回は在学生 Web 調査の予備調査（テストラン）であり、本調査は2014年度以降に実施する予定である。従って、今回の調査結果の値についての説明や解釈は省略し、Web 調査による実施・集計の方法論に限定して提言していくこととする。

2 方法

2.1 調査対象・集計対象

全体の調査は、短期大学コンソーシアム九州に加盟する九州地区の7短大の学生1,766名を対象に実施し、有効回答者数1,265名、有効回答率71.6%であった。なお、今回の予備調査は実施・集計の方法論を検討することを目的としているため、集計の対象としては、長崎女子短期大学の生活総合ビジネス専攻1年生25名のデータを中心に用いた。

2.2 調査時期・調査場所

集計対象とした長崎女子短期大学の調査は、2013年11月21日（木）11:20～12:00の40分間、長崎女子短期大学の第一情報演習室で実施した。

2.3 調査項目・調査システム

調査項目は、短期大学コンソーシアム九州（2012、2013、2014）が開発した「短大生の学びと生活」

に関する設問を、Web 調査に適した内容に編集して用いた。また、調査システムには、同じく短期大学コンソーシアム九州が開発した「共同教学 IR ネットワークシステム」を使用した。

2.4 調査手順

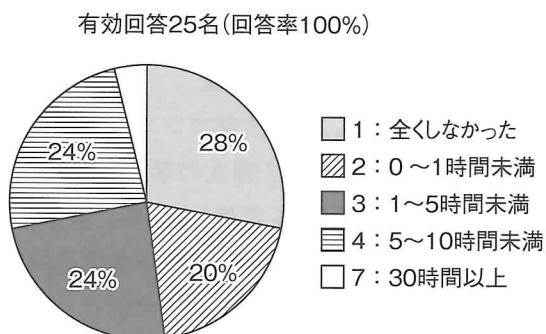
PC を使用する卒業必修科目「ビジネスデータ活用 2」の演習授業の時間に、以下の時間配分で一斉に Web 調査を実施した。

- ①主旨説明および PC の準備：15分間
- ②操作説明および回答作業：20分間
- ③回答確認および PC の終了：5分間

2.5 結果処理法

測定の指標は、主に「学生支援の満足度」と「学習成果の到達度」に関する 5 段階の自己評定尺度とした。集計は、1) 専攻の特徴、2) 学生のレベル別の特徴、3) 個々の学生の特徴、を明確にする 3 区分の方法を用いた。

e. ボランティア活動



3 結果

以下に予備調査のデータを中心に 3 区分 12 種類の集計方法について述べる。なお、それぞれの集計の目的に応じて、異なる対象や項目のデータを用いた。

3.1 「専攻の特徴」を明確にし、専攻全体の学生支援の改善につなげる集計方法。

3.1.1 7 短大の全体平均との比較 (Web 上の集計結果の円グラフを活用)

図 1 は、専攻の強みを表す集計方法である。設問内容は「前期の授業期間中に、次の活動に費やした 1 週間の合計時間は、どのくらいでしたか。平均的な 1 週間を思い出して一番近いものを選んでください。」である。自学と他学の結果を比較することで自学の強みが明確となる。左図が長崎女子短期大学のビジネス専攻、右図が短期大学コンソーシアム九州の 7 短大の平均である。

図 2 は、図 1 とは逆に専攻の弱みを表す集計方法である。設問内容は「半年間の本学での教育を

e. ボランティア活動

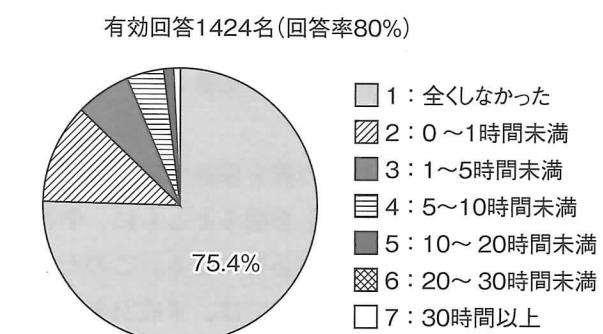
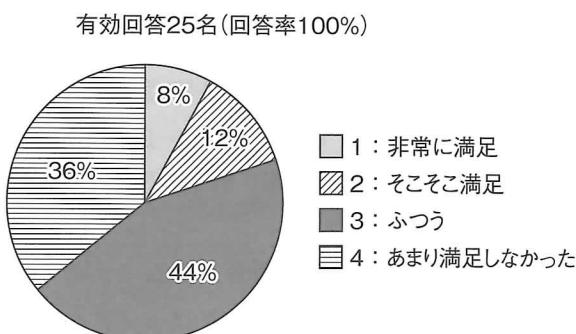


図 1. 専攻の強みを表す集計 (ボランティア活動の時間)

f. わかりやすい授業



f. わかりやすい授業

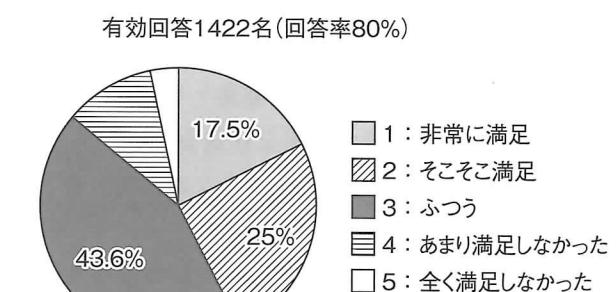


図 2. 専攻の弱みを表す集計 (わかりやすい授業の満足度)

振り返ってみて、「授業内容・方法」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。」である。自学と他学の結果を比較することで自学の弱みが明確となる。図1と同様に左図が長崎女子短期大学のビジネス専攻、右図が短期大学コンソーシアム九州の7短大の平均である。

3.1.2 4年前の在学生調査との比較（2009年10月の1年次調査との比較）

図3は、専攻の「学習支援の満足度」を4年前と比較した集計方法である。数年前の結果と比較することで、それまでの学習支援の成果を検証することができる。

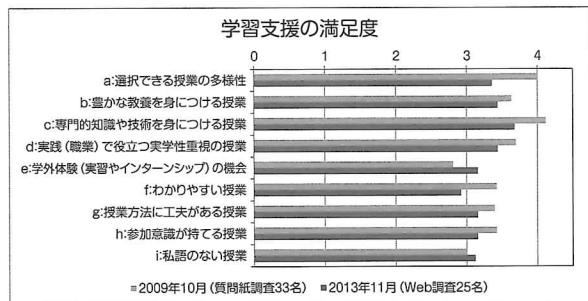


図3. 専攻の4年前の結果と比較した集計（学習支援の満足度）

図4は、図3と同様に専攻の「学習成果の到達度」を4年前と比較した集計方法である。数年前の結果と比較することで、それまでの学習支援の成果を検証することができる。

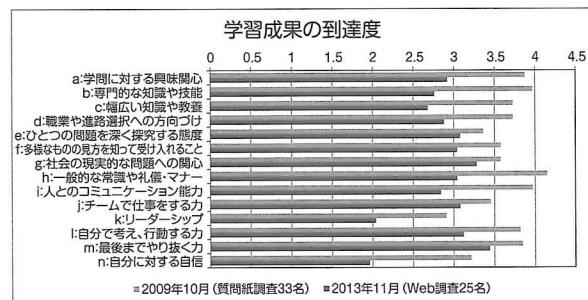


図4. 専攻の4年前の結果と比較した集計（学習成果の到達度）

3.2 「学生のレベル別の特徴」を明確にし、レベル別の学生支援の改善につなげる集計方法。

3.2.1 学習成果のレベル別比較

図5は、「成績の自己評価レベル別」の高校の

学習時間と短大の学習時間を示した集計方法である。この図から、成績の自己評価が高い学生と低い学生について、高校の学習時間と短大の学習時間の違いを比較することができる。

図6は、「成績の自己評価レベル別」の授業内容の満足度と自分への自信を示した集計方法である。この図から、成績の自己評価が高い学生と低い学生について、授業内容の満足度と自分への自信の違いを比較することができる。

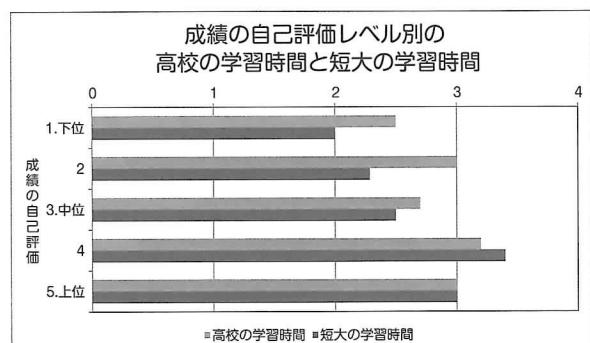


図5. 成績の自己評価レベル別の集計（高校の学習時間と短大の学習時間）

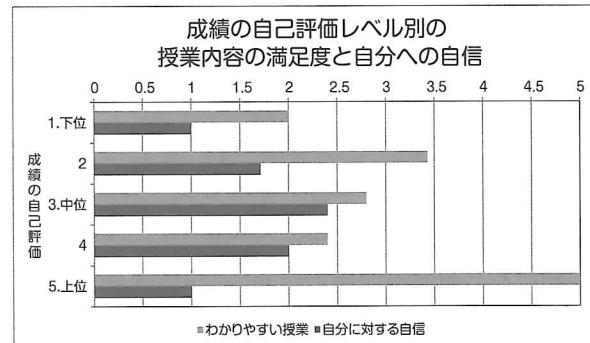


図6. 成績の自己評価レベル別の集計（授業内容の満足度と自分への自信）

3.2.2 満足度のレベル別比較

図7は、「授業内容の満足度レベル別」の専門

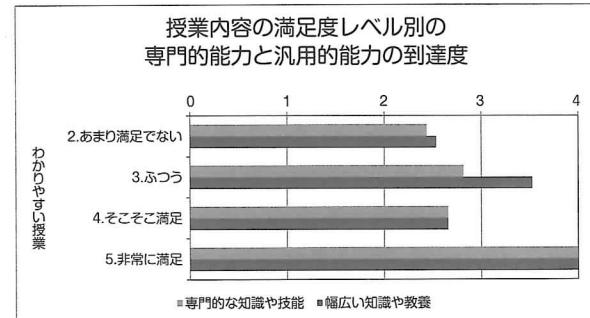


図7. 授業内容の満足度レベル別の集計（専門的能力と汎用的能力の到達度）

的・汎用的能力の到達度を示した集計方法である。この図から、授業内容の満足度が高い学生と低い学生について、専門的能力と汎用的能力の到達度の違いを比較することができる。

図8は、「進路支援の満足度レベル別」の職業選択の能力と社会問題の関心を示した集計方法である。この図から、進路支援の満足度が高い学生と低い学生について、職業選択の能力と社会問題の関心の違いを比較することができる。

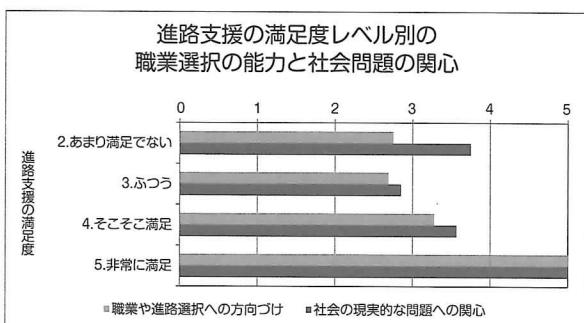


図8. 進路支援の満足度レベル別の集計（職業選択の能力と社会問題の関心）

3.3 「個々の学生の特徴」を明確にし、個別の学生支援の改善につなげる集計方法。

3.3.1 本学の入学時調査との比較

図9は、特定の学生の入学時と8ヶ月後の「短大生活への期待度」を示した集計方法である。この図から、特定の学生の「短大生活への期待度」の変化を把握することができるため、休学・退学の兆候を早期に発見する資料として活用できる。

図10は、特定の学生の入学時と8ヶ月後の「学習成果の到達度」を示した集計方法である。この図から、特定の学生の「学習成果の到達度」の変化を把握することができるため、休学・退学の兆

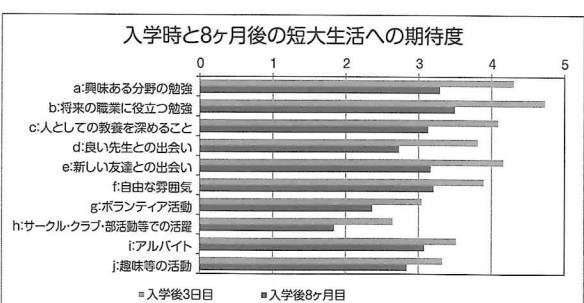


図9. 特定の学生の入学時と8ヶ月後を比較した集計（短大生活への期待度）

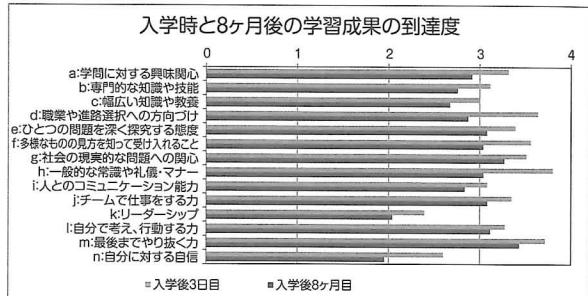


図10. 特定の学生の入学時と8ヶ月後を比較した集計（学習成果の到達度）

候を早期に発見する資料として活用できる。

3.3.2 本学の学務データとのリンク

図11は、個々の学生の基礎学力（一般常識）と外向性尺度（性格特性）の関係を示した集計方法である。この図から、個々の学生の「学力と性格」を軸とする位置関係を把握することができ、個々の学生に応じた対応・支援を行う場合の一助となる。

図12は、個々の学生の学習成果（専門的・汎用

基礎学力と外向性尺度による位置づけ
2012L(n=33)と2013L(n=25)

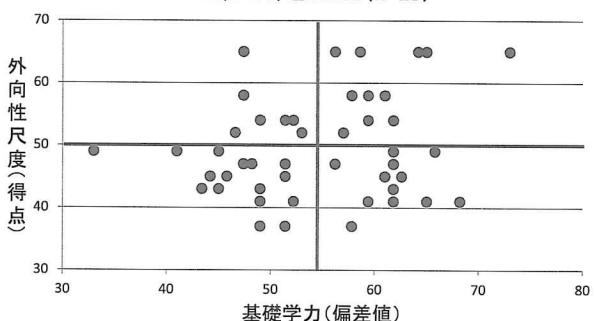


図11. 個々の学生の「基礎学力と外向性尺度の関係」による集計

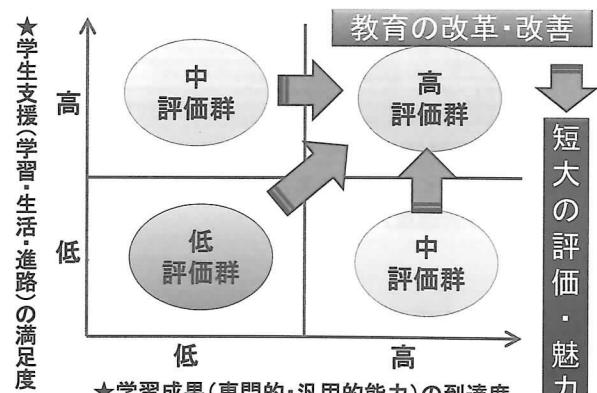


図12. 個々の学生の「学習成果の到達度と学生支援の満足度の関係」による集計の模式図

的能力)の到達度と学生支援(学習・生活・進路)の満足度の関係を示した集計方法の模式図である。この図から、個々の学生の「到達度と満足度」を軸とする位置関係を把握することができ、個々の学生に応じた対応・支援を行う場合の一助となる。

4. まとめ

本研究は、「共同教學 IR ネットワークシステムの構築」の一環として、従来質問紙で実施していた在学生調査を Web 上で実施することで、効率的で多角的な調査の実施・集計を可能にする方法論について検討することを目的とした。その結果、以下の点について今後検討する必要性が明確となった。

1) 実施方法の選択(有効回答率を上げるために)

①従来の質問紙による方法と今回の Web 調査による方法では、無記名と記名式の要因や未回答率の明確化の要因により、被験者の回答結果に差異が生じる可能性がある。

②有効回答率を上げるためにには、卒業必修科目の時間に PC で一斉に実施した方がいいが、今後の卒後 1 年目調査を卒業生にスマートフォンで実施することを考えると、スマホでの個別実施を導入した方がいい。

2) 質問項目と選択肢の改善

①「短大の総合評価」に関する設問を追加することで、「短大の総合評価レベル別」の比較が可能になる。

②回答の選択肢番号の順番を統一し、開始時の選択バーの位置を中央に設定することで、被験者の真の回答を得ることができる。

③回答の選択肢にループリックを用いることで、回答の尺度をより客観に設定でき、被験者から一貫した回答を得ることができる。

3) 集計結果の有効利用

①集計結果の「一斉の学生支援での活用法」として、一斉授業、グループ別クラス編成による学習・進路支援が考えられる。

②集計結果の「個別の学生支援での活用法」として、二者面談、カウンセリング、授業評価アンケートとのリンクが考えられる。

③集計結果の「共通認識の問題」として、アンケートの信憑性、数値の意味の理解、データに基づく客観的な解釈のスキルが重要である。

4) 集計作業の効率化

①今回の在学生 Web 調査では、Web 上から生データをコピーし、エクセルのピボットテーブルで質問項目別に一覧表を作成し、件数・平均を算出して、各種クロス集計表を作成し、最後に各種のグラフを作成するという、非常に煩雑な作業が必要となる。今後はこれらの作業の効率化・自動化が課題である。

②「学生支援の満足度」や「学習成果の到達度」の評価指標を明確に体系化することで、自己点検・評価の業務全般の効率化を図り、担当教職員の負担をより軽減することが大切である。

今後は、今回実施した在学生 Web 調査の予備調査(テストラン)で明確となった問題点について十分検討し、2014年度以降に実施予定の本調査に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 武藤玲路・武藤郁和 (2012) 「短大評価に関する追跡調査」、『長崎女子短期大学紀要第36号、p85-91』
- 2) 武藤玲路・武藤郁和 (2013) 「短大評価に関する追跡調査(2)」、『長崎女子短期大学紀要第37号、p21-28』
- 3) 武藤玲路・武藤郁和 (2014) 「短大評価に関する追跡調査(3)」、『長崎女子短期大学紀要第38号、p29-36』